

# 通訳・翻訳課程の効果的教育システム構築について

## Designing an Effective Education System for Translating and Interpreting Course

柴原 智幸

### Abstract

神田外語大学では、2020 年度を目標に、通訳・翻訳課程の再編に乗り出そうとしている。通訳・翻訳課程は 2009 年に発足したが、2013 年度より大幅な改編が加えられており、今回の再編にあたり、過去 10 年間の教育システムの長所を取り入れ、問題点を是正することが必要になる。そこで新たに 4 つの基本方針を設定し、その妥当性を検証するため 2012 年に行なったアンケート調査を分析・考察した。その結果、その妥当性が確認された。

## 1 はじめに

2018年7月、神田外語大学「通訳・翻訳課程」の再編の方針が打ち出され、作業部会が発足した。

筆者は旧・「通訳・翻訳課程」（呼称に関しては後述）のコーディネーターとして2009年に着任し、2012年度まで直接指導を行ってきた。

その経験から、新制・「通訳翻訳課程」の教育システムでは、

- ・学費の減免
- ・学習環境の整備
- ・文法指導の徹底
- ・教養教育の徹底

の4点が重要になると考えている。

本稿では「通訳・翻訳課程」の沿革をまとめ、旧・「通訳・翻訳課程」時代に行なった各種調査の結果や備忘録、その後の現場での指導経験などから、上記4点の妥当性を検討する。

さらに、旧・「通訳・翻訳課程」の強みの分析も行ない、それを新制・「通訳・翻訳」課程で再現する方策についても検討する。

## 2 通訳・翻訳課程の沿革

本稿では便宜上、「通訳・翻訳課程」を3つの時期に分けて、以下のように呼称する。

- ・2009年度～2012年度 旧・「通訳・翻訳課程」
- ・2013年度～本稿執筆時点（2018年） 新・「通訳・翻訳課程」
- ・2020年度以降（予定） 新制・「通訳・翻訳課程」

### 2-1 旧・「通訳・翻訳課程」

神田外語大学「通訳・翻訳課程」は、2008年当時、英米語学科内で「圧倒的

な英語力を持つ学生の育成」を主眼として設置が決定された<sup>1</sup>。その際、国際教養大学の教育内容にも大きく影響を受けている。

2009年から、新入生の中から希望者を募り、13人<sup>2</sup>を選抜して独自のクラスを編成。筆者をコーディネーターとして正式に発足した。

この際、指導の3本柱として「英語力」「日本語力」「知識量」を打ち出し、特に教養教育に重点を置いている。11月に初の勉強合宿も行ない、名古屋外国語大学通訳コンテストにも出場した。

2010年は1期生20人<sup>3</sup>、2期生15人。学生主体の勉強会が発足したほか、工場見学、映画試写会、東京外国語大学コンテスト出場、観劇、名古屋外国語大学通訳コンテスト出場、明海大学通訳コンテスト出場など、各種の活動を行った。勉強合宿を2回、希望者を対象とした文法学習会も実施している。

2011年は、1期生10人、2期生18人、3期生15人が在籍した。1期生は3年生になり、教職課程および児童英語教員養成課程の履修を希望する者が多く、並行履修は非常に困難だったため、通訳・翻訳課程の履修を中止する学生が多かった。また3年生からゼミナールが始まり、興味のあるゼミへ参加するために履修を中止する学生も相次いだことが、1期生の減少の主な理由である。

2011年より、学生の要望を受け、毎週土曜日に筆者が指導する勉強会を実施した。当時のルース駐日アメリカ大使の講演で同時通訳を担当したほか、学内の講演会などで通訳を行った。勉強合宿なども複数回実施し、名古屋外国語大学通訳コンテスト、明海大学通訳コンテストに参加している。

2012年は、1期生4人、2期生6人、3期生15人、4期生11人<sup>4</sup>が在籍した。

---

<sup>1</sup> 「『通訳・翻訳課程』の立ち上げから現在に至るまでの経緯およびその現時点での成果と今後の見通しについて」(柴原作成資料 2011年)

<sup>2</sup> 本来の定員は15人だったが、高いレベルの学生に絞り込むことを優先した結果だった。

<sup>3</sup> 本来は、2年次の追加募集で15名、合計30名となる予定だったが、希望者が非常に少なかった。この時点ですでに定員を大幅に割り込んでいる。

<sup>4</sup> 3年生、4年生の履修中止が多く、在籍生の人数が減少したため、新入生である4期生は多少多めに選抜しかかったものの、応募者のレベル低下が著しく、基準をある程度下げたもののこの人数にとどまった。

複数回の勉強合宿、名古屋外国語大学・明海大学での通訳コンテストに参加している。名古屋外国語大学での通訳コンテストにおいては、1期生の学生が全国3位に入賞した。

5月に課程見直し作業部会が開かれ、定員の充足率が低いことが問題になった。特に2期生（当時3年生）の履修中止が多数出たのは、筆者の指導が厳しすぎるからだと言われた。また、ゼミナールに当たる授業を土曜日に設定したことも、履修者減少の一員とされた<sup>5</sup>。

これを受け、筆者はコーディネーターを退き、通訳・翻訳課程は教務課と英米語学科の共同管理となることが決まった。

## 2-2 新・「通訳・翻訳課程」

2012年5月の課程見直し作業部会では、最優先課題は、定員の充足であるとされ、そのために履修単位数も大幅に削減された。具体的な単位数は以下のとおりである。

2009年度 82単位

2010年度 68単位

2013年度 36単位

さらに、発足以来行われてきた選抜も行なわないことになり、履修開始年度を2年生からとしたうえで、希望者は全員履修できるようにした。この措置により、履修者はほぼ倍増することになるはずだが、筆者の知る限りでは、新規の履修者は数名にとどまっている。

なお、教務課と英米語学科の共同管理となった通訳・翻訳課程であるが、英米語学科内では管理の担当者はおらず、教務課においても正確な人数を把握してい

---

<sup>5</sup> 本学では土曜日にも教職課程の授業など、各種授業が開講されている。また、ゼミナールに当たる授業を土曜日に開講した背景には、2011年より学生からの希望で土曜日に勉強会が行われており、学生からの同日に開講してほしいとの希望があった。

なかった<sup>6</sup>。つまり、2013 年度以降は、課程自体は存在するものの、管理者不在の状態に置かれていることになる。

また、新・「通訳・翻訳課程」に移行した後も、筆者は旧・「通訳・翻訳課程」の学生と勉強会や勉強合宿、通訳コンテストへの出場を行っていたが、旧・「通訳・翻訳課程」の最後の世代の学生が卒業した 2015 年度を持って、「通訳・翻訳課程」としての組織だった活動は終了している。

### 2-3 新制・「通訳・翻訳課程」

通訳・翻訳課程が上記のような状態であることを受け、英米語学科内でも課程再生の機運は何度か高まったが、実質的な改革に着手することはなかった。

2018 年 7 月に、2020 年度からの本格的な再編を目指す作業部会が組織され、筆者も加わることになり、元コーディネーターとしての経験を踏まえて意見を述べたほか、9 月には Can-Do リスト案を作成している。

このリスト案は、単に教育内容だけではなく、大学の経営に関わるにも提言を行っているため、その内容がどこまで新制・「通訳・翻訳課程」に反映されるかは、現時点では未知数である。

## 3 新制・「通訳・翻訳課程」の重点項目案

旧・「通訳・翻訳課程」コーディネーターとしての経験を踏まえ、新制・「通訳・翻訳課程」の重点項目として、筆者は次の 4 点を挙げたい。

- ・学費の減免
- ・学習環境の整備
- ・文法指導の徹底
- ・教養教育の徹底

---

<sup>6</sup> 当時、在籍生の一覧を教務課から取り寄せた所、すでに履修を中止した学生が相当数含まれていたほか、履修中の学生の名前がないなど、かなり不完全なものであった。

### 3-1 学費の減免について

旧・「通訳・翻訳」課程を指導している間だけではなく、2009年の着任以来の学生指導で一貫して感じていることが、学生たちの学習時間が少なすぎるということだ。

学習への動機付けが弱いという問題もちろん絡むのだが、それ以上に、アルバイトが学習時間を奪っているという印象が強い。

参考までに、旧・「通訳・翻訳課程」設立の際に、カリキュラムなどを参考にした国際教養大学の現学長、勝又美智雄氏は、国際教養大学の学生の勉強時間について次のように語っている。

『月曜から金曜まで毎日5時間くらい授業があり、その宿題と課題レポートやプレゼン資料の作成などで毎日5~7時間は自習しなければ授業についていけない。』<sup>7</sup>

新入生に対して、留学生と2人1部屋の寮生活を義務付けている国際教養大学とは違い、神田外語大学には長時間かけて通学している学生も多い。そのような学生も、クラブ活動はしてなくてもアルバイトはしている、という場合が多く、したがって勉強時間を確保するには、アルバイトの削減しか有効な手段が考えられない。

また、旧・「通訳・翻訳課程」では、通訳・翻訳の準備の一環として、さまざまなイベント（演劇、博物館・美術館の見学など）への参加を促したくても、アルバイトが入っているために参加が出来ない学生も多かった<sup>8</sup>。

1か月のアルバイト収入を、平均5万円と考えた場合<sup>9</sup>、1年間ではおよそ60

---

<sup>7</sup> 「最強の英語学習法」勝又美智雄著 IBC バブリッシング p.152

<sup>8</sup> 旧・「通訳・翻訳課程」において、ゼミナールに相当する授業と勉強会を土曜日に設定したことに対しても、見直し作業部会では「土曜日にアルバイトをする必要のある学生を排除した」と、問題視された。

<sup>9</sup> 独立行政法人日本学生支援機構の平成28年度学生生活調査によると、大学生のアルバイトの平均月収は3万円。ただし、神田外語大学の学生、さらに通訳・翻訳課程の学生に限ったデータは存在しない。旧・「通訳・翻訳課程」時代に学生たちと話した記憶を元に参考額を設定した。

万円となる。旧・通訳翻訳課程では、勉強合宿や通訳コンテストの見学など、筆者も学生も私費を投じての活動も多かった。

この部分を少なくとも学生に関しては、大学側が「奨学金」という形で授業料を減免する形で補填してはどうかと考える。アルバイトをする必要をなくすことにより、勉強時間を確保するのである。

また、旧・「通訳・翻訳課程」においては、課程に在籍していないと履修が出来ない授業が、ゼミナールに当たる授業しかなく、課程の求心力が弱かった。履修を中止しても主要な科目（通訳法・翻訳法）の授業は問題なく履修できるため、在籍生の減少に拍車をかけてしまった部分はある。

そこで、在籍生に関しては授業料を減免することにより、金銭的なメリットと言う形で、課程の求心力も強化できると考えられる。その意味では、単なる減額ではなく、思い切って全額免除することが望ましい。

参考までに神奈川大学で行われている「給費生試験」では、合格者に授業料全額（文系で年間 100 万円、理系で 120 万円）を 4 年間支給し、さらに自宅外通学生には生活費（年間 70 万円）を 4 年間支給している<sup>10</sup>。

2018 年度においては、この給費制試験に 303 人の合格者を出している<sup>11</sup>。神奈川大学の 2018 年度の学生数は 1 万 8 千 431 人、それに対して神田外語大学の 2018 年度の学生数は 4064 人で、これは神奈川大学のおよそ 22%に相当する。

神田外語大学の財政的な余裕が神奈川大学と同様だという前提の話になるが、学生数の比率から単純計算して、67 人の学生の学費を全額免除することが可能ということになる。

旧・「通訳・翻訳課程」の在籍者数から考えて、新制・「通訳・翻訳課程」の履修者数は、1 学年 15 人程度と仮定すると、4 学年で 60 人となり、数字の上では十分実現可能なのではないかと考えられる。

---

<sup>10</sup> 以下、神奈川大学に関するデータは全て神奈川大学公式ホームページによる。

<sup>11</sup> ただし、その全員が入学しているかどうかはデータがない。

通訳・翻訳課程を再生するには、このぐらいの思い切った措置も必要なのではないか。

### 3-2 学習環境の整備について

旧・「通訳・翻訳課程」が3年目を迎える直前、東日本大震災が発生した。その後、節電などの対応を受けて、図書館の利用が19時までには制限され、学生たちから不満の声が上がったことを、筆者はよく覚えている。その後、図書館の利用時間は延びたが、それでも平日は19時50分まで、土曜日は17時までで、日曜日は休館となっている。

学生には土日こそ図書館にこもって、思い切り勉強してほしい。その意味では、図書館の開館時間を平日は21時<sup>12</sup>、土曜日も19時ぐらいまで延ばし、日曜日も9時から17時ぐらいまでは使えることが非常に大切になってくる。

本稿執筆時点では、基本的に日曜日には学生の学内への立ち入りそのものが制限されているが、コンピューターなどが使えるメディアプラザも、日曜日にも使用できるようにすることが望まれる。新入生に対してiPadの購入を義務付けて以来、自宅にPCを持たない学生も増えているが、タブレットは基本的に閲覧用であり、通訳用の資料の作成や翻訳の訳文作成などは、PCを使った方が効率的なのは明らかだからだ。

また、教職課程の学生には、専用の研究室があり、通訳・翻訳課程の学生にはなかったことも、旧・「通訳・翻訳課程」の学生が不満に感じていたことだ。様々な資料や教材なども、保管場所がないため筆者の研究室に保管していたのだが、そうすると筆者が大学に出勤しない日の学習が大きく制限されることになってしまった。せめて、同じ大学内に設置された「課程」である教職課程と同じレベルの学習環境は整備したかったと感じる。

---

<sup>12</sup> 現時点では学生は20時までには学内から退去することになっているため、その規則から見直すことが必要になる。



### 3-3 文法指導の徹底について

旧・「通訳・翻訳課程」の学生を指導している際に、一番困難だったのは英文法の知識が欠落している学生が多かったことだ。1期生はそれほどでもなかったが、4期生は英文法の知識不足が目立ち、せつかくやる気はあっても、それを実際の通訳・翻訳につなげられずに苦しむ学生が多かった。

大学での英語学習の基礎とも言えるリーディングにも支障が出るほどで、文法を体系的に教えたくてもその時間も機会もなく、断片的に指導しても定着せず、しばらくしてまた同じことを指導しなければならないこともたびたびあった。

特に翻訳においては、原文の正確な理解こそが重要になってくるが、文法事項の理解が不十分なため、仮定法などの微妙なニュアンスをくみ取ることが出来ず、辞書で語義を理解するだけでは適切な訳文が作成できないケースが目についた。

また、通訳においても、**register** に配慮できないのはまだ良い方で、構文の崩れた、非常にブロークンな英語での訳出となることもしばしばだった。

旧・「通訳・翻訳課程」においては、自力、もしくは筆者の助けを借りて、英文法を抜本的に学び直した学生だけが、各種コンテスト入賞、課程修了など、一定の成果を残した。

新・「通訳・翻訳課程」においては、学生は英文レポートの作成などもタブレットを使うようになり、PCでワードを使って作成しなくなったため、ワードの文法修正機能を参照すれば簡単に気付けるレベルの文法ミスにも気付かず、筆者の指摘があっても何度も同じレベルのミスをくりかえするという事例が多かった。

今後、神田外語大学の新生の大幅なレベルアップが期待できるとは必ずしも言えない状況に鑑み、個々の文法事項を、折に触れて指導するだけでは、体系的かつ永続的な英文法の知識は形成されづらい。

したがって、新制・「通訳・翻訳課程」においては、履修開始から早い時期（可能であれば1年生前期）に英文法を徹底して身につけておくことが必須だと思われる。また、英文和訳が英文の内容の把握のチェックには効率的なことが判

明している（柴原 2017）、翻訳（英文和訳）を効率的に導入することで、読解力の向上に役立てたい。

### 3-4 教養教育の徹底について

神田外語大学の学生の特徴の一つとして、「指示された課題」はやるものの、それ以外に積極的に取り組もうとはせず、図書館などで知的世界を広げようという試みも、あまり活発ではないことがあげられる<sup>13</sup>。講演会も盛んに行われているものの、授業時間中に実施されるものは、講師を招聘した教員の担当している授業を履修している学生でない限り、参加が難しい。また、放課後に実施されるものは、アルバイトなどを理由に参加しない学生が多い<sup>14</sup>。

そもそも外国語とは、「自分の知りたいことを知り、伝えたいことを伝えるためのツール」である。その習熟には、知的好奇心を持つことが欠かせない。しかし、入学してくる学生、少なくとも英語を専攻する学生は、「英語が好きなので、英米語学科に入学した。英語そのもの以外には、あまり関心がない」という学生が年を追うごとに増えている<sup>15</sup>印象がある。

通訳・翻訳には当然ながら「試験範囲」というものはなく、あらゆる分野が対象となるが、神田外語大学の学生は少数の例外を除き「文系」の学生が多く<sup>16</sup>、たとえ初歩的な内容であっても「理系」と目されるトピックに関しては、取り組

<sup>13</sup> 読書を中心に上げた授業「本を読む」が複数開講されていることは特筆に値する。しかし、残念ながら現状を覆すまでには至っていない。

<sup>14</sup> 旧・「通訳・翻訳課程」で、通訳者の鳥飼久美子氏の講演会を行ったものの、集まったのは地元の年配の英語学習者がほとんどで（学内外に公開された講演会だった）、学生は旧・「通訳・翻訳課程」履修者以外は、あまり集まらなかったという事例もある。字幕翻訳者の戸田奈津子氏の講演会ですら、クリスタルホール（120名収容）が、かろうじて満席になる程度の動員にとどまった。

<sup>15</sup> アンケートなど正式な調査を行ったわけではないため、あくまで教壇に立つものとしての印象論となるが、学習者の姿勢について述べる場合、実際に教室で触れあっている教員の「肌感覚」とでもいうものが、その本質をとらえていることも多い。

<sup>16</sup> 入試科目がいわゆる「私立文系」型で、数学や理科などが含まれないことも、その傾向に拍車をかけていると思われる。入試の試験科目がより多い方が、オールラウンドに対応できる学生を選抜しやすい。しかし、試験科目にはもちろん経営的な判断も絡み、理想を即実現できるとは限らないのが現実である。

む前から及び腰になることも多い。

旧・「通訳・翻訳課程」において、そのような「英語特化型」とでもいうべき学生は、入学後半年から1年ぐらいの間に、学習の動機付けを失うことが多かった。現在の新・「通訳・翻訳課程」の学生においても、同様の傾向がみられる。

その理由を分析しようと面談なども多々行なってきたが、多かったのは「知りたいこともあまりないし、伝えたいこともあまりない」という理由だった。おそらくこれは、回答が一つに絞り込める「解あり学習」への過剰適応が理由なのではないか。「模範解答」があるのであれば、その暗記によって定期試験などで好成績をおさめることは出来る。別の言い方をすれば、「学習」と「試験対策」を混同している学生が多く、神田外語大学の既存の教育体系では、その誤解を解決することが出来なかったということではないか。

「何に興味を持ち、何を伝えるか」という点は、今まで学生に一任されていた感があるが（そして、それは本来の大学教育という観点から見れば、至極当然のことなのであるが）、現状を打破するためには学生たちの「知の世界」を積極的に広げるべく、教養教育、いわゆる「リベラルアーツ」に力を入れていく必要がある。特に近現代史や政治・経済、環境（特にエネルギー問題、その中でも原子力関連）、医療、軍事など、ぜひ押さえてほしい分野にも拘わらず、かなり大きく知識が欠落している分野について、しっかりとカバーしたい。また、芸術一般に関しても、その観賞のポイントも含め、知っておきたいところである。

授業により教育できる部分もあるが、学生による自学自習、および体験学習を軸に据えたい。具体的には読書、映画鑑賞、演劇鑑賞、音楽鑑賞に加え、工場の見学、講演会への参加、博物館や美術館の見学などとなる。

#### 4 2012年春のアンケート調査

旧・「通訳・翻訳課程」に、初めて1年生～4年生までが揃った2012年5月頃、筆者は在籍生を対象としたアンケート調査を行ない、当時の在籍生の、ほぼ全員

から回答があった<sup>17</sup>。課程の問題点を洗い出し、より効果的な教育を行うためである。アンケートでは、以下の9点を尋ねた。

- 1 資格試験の成績
- 2 留学条件を満たしたか否か
- 3 すでに留学を行った、あるいは現在留学中か
- 4 1年次からの在籍者か、2年次からの在籍者か<sup>18</sup>
- 5 学院からの編入生かどうか
- 6 通訳・翻訳課程に入って良かったと思う点は何か
- 7 現在の悩みは何か
- 8 通訳・翻訳課程を改善するために柴原<sup>19</sup>に求めるものは何か
- 9 通訳・翻訳課程を改善するために大学に求めるものは何か

ここでは、質問7と質問9を中心に、質問6への回答も適宜援用しながら、本稿冒頭に掲げた新制・「通訳・翻訳課程」の教育システムの4つの柱の妥当性を検討するとともに、新制・「通訳・翻訳課程」でも引き継ぐべき、旧・「通訳・翻訳課程」の強みについても分析したい。

アンケート結果を学年別および全体で数値化し、合わせて、旧「通訳・翻訳課程」の最盛期の雰囲気をよく伝えていると思われる、特筆すべき意見に関しては、補足としてその抜粋を掲載する。

---

<sup>17</sup> 当時の在籍生の数も、資料によりばらつきがあるが、筆者の手元にある資料では、4年生4名、3年生6名、2年生15名、1年生11名。そのうち1年生1人を除く全員から回答があった。

<sup>18</sup> 旧・「通訳・翻訳課程」に在籍するには、入学直後の選抜試験に合格するか、2年生になる直前に行なわれる追加履修者選抜試験に合格するかであった。2年生以上であれば、希望者は無試験で履修が出来る、新・「通訳・翻訳課程」とは、この点が大きく異なる。

<sup>19</sup> 本稿執筆者。当時「通訳・翻訳課程」コーディネーター。

## 4-1 質問7「現在の悩みは何か」に対する回答

回答	4年	3年	2年	1年	全体
自分の学びと授業課題の両立		1	3	6	10
留学が出来るか		1	3		4
金銭的問題		1	2		3
他の履修生との実力差			3		3
後輩に伝えるべき知識量の不足		1			1
課程の将来・後輩の育成	1				1
学びたいことが多すぎる	1				1
留学から帰国後の学びの充実	1				1
大学院進学	1				1
進路（大学院か就職か）		1			1
修了要件が満たせるか			1		1
十分活動に参加できない				1	1
睡眠時間が少ない				1	1
柴原と話が出来ない				1	1

- ・様々な分野を勉強して「全てを学びに」という通翻のモットーにあるように、いろいろなことを学ぶのが楽しく、それに向けて努力できていると実感するが、自分の専門分野・得意分野に対しての熱意や誰にも負けない知識量などが自分には欠けており、全てを学んでいく堰堤のさらに上の段階で、得意分野の知識を通翻課程に還元していくことが上級生としての使命だと考えるので、そういった点についてさらに努力をしていきたい。(3年)
- ・自分の勉強とアルバイトの両立をするのは厳しい現状もあります。そういった点で、大学独自の返済義務のない奨学金制度があれば助かるのにな、と思った

りしています。(2年)

4-2 質問9「通訳・翻訳課程を改善するために大学に求めるものは何か」に対する回答

回答	4年	3年	2年	1年	全体
金銭的補助	4	1	4	4	13
大学施設開館時間の延長 <sup>20</sup>		1	5	5	11
勉強部屋・資料保管室の設置	3	1	5		9
履修生のみ取れる授業を増やす	1		1		2
通訳課程の知名度向上				2	2
通訳法上級クラスの開設	1				1
留学制度の改定	1				1
必修科目見直し		1			1
通訳課程紹介スペースの設置		1			1
英語開講の授業を増やす			1		1
一般生対象の勉強会				1	1

- ・通訳課程生でしか履修することができない授業を開講してほしいです。(中略)  
 これまで10回ほど合宿、他のイベントを開催し、どの行事でも密度が濃い学びを行ってきました。一般的なクラスでは不可能なことを何度も実現してきました。もちろん、その度に参加費が発生しています。すべてを合計するとかなりのものになります。これから入ってくる後輩のためにも少額でも良いので何かしらの学校からの補助があれば助かります。(4年)
- ・課外活動の際に経済面で(交通費や宿泊費など)援助してほしいです。援助し

<sup>20</sup> 当時の図書館は19時閉館で、現在は19時50分となっているが、個人的にはまだまだ短い。また、日曜日には学生は原則的に構内に立ち入れず、施設も開いていない。

ていただく代わりに通訳課程の生徒は何を学んだか、お金を何に使ったか学校に報告します。(4年)

- ・通訳翻訳課程専用勉強スペースなどを作ってほしい。教職課程にはあって、通訳翻訳課程にないのは悲しい。

合宿などの費用を少しでも出してほしい。ステップインなどのサークルにはたくさんのお金が出るのに、通訳翻訳課程の大切な学びには資金が出ないのが悲しい。(4年)

- ・授業料減免や通訳ブース設置などを含んだ通訳・翻訳課程に対してのバックアップ体制を一刻も早く確立させること。(3年)
- ・7号館 MALC 地域言語ブースのような、通訳・翻訳課程の活動を紹介するスペースを設けていただければと思います。日頃の活動を紹介することで、意欲のある学年の次年度の加入にもつながると思います。(3年)
- ・合宿への資金援助(できれば交通費なども)。遊びではなく一生懸命、勉強しに行くのだからお金でサポートしていただけたらと思う。そうすれば学生の意識も高くなりもっと勉強しなくてはとなるのではないかと感じる。(2年)
- ・大学施設の開館時間を延ばしてほしい。夜遅くまで大学の施設を活用して勉強に励みたいため。(2年)
- ・通訳でしっかり勉強に取り組むための自主勉強スペースや、資料・教材などを補完するスペース。合宿で作成されたプレゼンのレジュメや、通訳生のお勧めする本などを特に保管したいです。(2年)
- ・金銭的援助をしていただきたいです。(中略)通訳生は「学び」に重点を置いているので必要最低限しかアルバイトをしません。(1年)
- ・通訳課程だけのためではないが、ゴールデンウィーク中などの休暇時間にも図書館を開けていてほしい。(1年)

#### 4-3 質問6「通訳・翻訳課程に入って良かったと思う点は何か」に対する回答

回答	4年	3年	2年	1年	全体
志の高い仲間に出会えた	2	4	13	7	26
視野や考え方の幅が広がった	3	5	5	2	15
勉強の楽しさを知った	2	2	6	1	11
柴原の指導を受けられた	1	1	1	2	5
貴重な経験が出来る			2		2
「本当の学び」が体験できた			2		2
大学生活が充実した				1	1

## 5 考察

### 5-1 質問7「現在の悩みは何か」への回答に対する考察

一番多かったのが「自分の学びと授業課題の両立」だが、細かく見ていくと、1年生が6人と最も多く、学年が上がるにつれ人数は急減し、4年生は1人もいない。その頃には自分なりの勉強の方法論を確立していたことを表すと思われる。アンケートが行なわれたのが、1年生が入学した翌月と、まだ学習そのものに慣れない時期だったことも、この結果に関係しているだろう。

学年が上がるにつれ、「個人の悩み」、「学ばなければいけないことを、どう学ぶか」という個人レベルの悩みから「自分の学びをどう広げていくか」という、より広い視野に立った悩みに移っていく様子が分かり、学生の成長が伺える。

新制・「通訳・翻訳課程」においては、課題の過多には注意を払いつつも、スタディ・スキルの伝授を含む、学習支援体制の充実により、学生の学びへの適応を促進する方向で考えるのが良いだろう。

学ぶべきことは多く、高校時代の学び残しも多い以上、多少は負荷をかけて勉強することは避けて通れないからである。



## 5-2 質問9「通訳・翻訳課程を改善するために大学に求めるものは何か」への回答に対する考察

自分の行動である程度事態の改善が期待できる質問7とは違い、こちらは学習環境の改善を望む、強い希望が相次いだ。アンケートの文面にも、悲痛なまでの要求がつづられている。

金銭的補助を求める声が最も多かったのは予想通りだが、大学施設の開館時間延長、勉強部屋・資料保管室の設置を求める声も、それに順ずるレベルで強い。大学施設開館時間の延長に関しては、上級生はそれほど強く求めているのは、大学という場所にこだわらず、あらゆるところで学ぶようになっていったからなのだが、大学の学習環境を整えることが急務なのは変わらないであろう。

また、実際に声を挙げたのは1名だが、課程履修生のみが履修可能な授業を求める意見も、すでに述べた「通訳・翻訳課程の求心力の弱さ」を裏付けるものとして、特筆に価する。

新制・「通訳翻訳課程」においては、アルバイトを減らして学習時間を確保するためにも、やはり金銭的補助が何よりも優先事項となると思われる。たとえ少額であれ、大学が自分たちの学びを応援しているという姿勢を見せることは、学生の士気の向上に大きく寄与する。ただ、それだけでは課程の十分な求心力にはなりえないため、やはり学費の大幅な減免が理想である。理想を言えば、いったん学費を全額免除とした上で、「通訳・翻訳課程運営費」のようなものを年間数十万円徴収して、学習関連の各種費用に当てたいところだ。

また、アンケートを実施した当時と比べて、施設の開館時間延長の問題はほとんど改善されておらず、通訳・翻訳課程生だけに限った形でも延長を行い、学習環境を整備するのが急務となろう。

### 5-3 質問6「通訳・翻訳課程に入ってよかったと思う点は何か」への回答に対する考察

旧・「通訳・翻訳課程」は「(良い意味で)家庭的な集団」とよく言われた。先輩後輩の距離が近く、お互いに支えあって学んでいたのである。そのようなことが、全学年をとして非常に多かった、「志の高い仲間に出会えた」という声に反映されていると思う。

また、「視野や考え方の幅が広がった」「勉強の楽しさを知った」という回答は、当時実施していた教養教育が課程生に受け入れられ、成功をおさめていたことを裏付けている。このように学生の意識を変えていく上で、いわゆる「試験範囲」がなく、語学力に加えて幅広い背景知識も要求される通訳・翻訳の勉強は、うってつけであった。

このような旧・「通訳・翻訳課程」長所を新制・「通訳翻訳課程」にも継承させるべく、語学力向上はもちろんのこと、教養教育を大きな柱としていくべきだと考える。

## 6 まとめ

旧・「通訳・翻訳課程」の長所を新制・「通訳・翻訳課程」に継承させ、その一方で問題点を是正するための教育システムを考える上で、筆者が提案した、

- ・学費の減免
- ・学習環境の整備
- ・文法指導の徹底
- ・教養教育の徹底

に関して、「文法指導の徹底」を除いた3点に関しては、2012年に実施したアンケートの分析と考察から、おおむね妥当であることが分かった。

また、残る「文法指導の徹底」も、通訳や翻訳を指導する上では、当然必要になってくる要素である。通訳力(翻訳力)というものを定義すれば、「英語力+

日本語力+知識量」となり、後者2つに関しては、教養教育でカバーできる部分もあるが、そもそも英語力が充分あることが、全ての前提条件になるのは自明の理である。

毎年行なっていた選抜試験の結果から言っても、年を追うごとに英語力は低下傾向にあったが、選抜試験を行なわなくなってからの7年間で、劇的な向上を見たとは思えない。むしろ徹底的なてこ入れを感じるが多くなっている以上、やはり「文法指導の徹底」という点も、妥当だと判断できる。いくら教養教育が成功し、視野や考え方の幅が広がっても、「通訳・翻訳課程」を標榜する以上、一般の学生とは隔絶した英語力も、必要になってくるためである。

この4点を柱として新制・「通訳・翻訳課程」を運営し、大学の英語教育界に、新たなスタンダードを作り上げて行きたい。

## 7 引用文献・参考資料

勝又美智雄「最強の英語学習法」IBCパブリッシング

柴原智幸『「通訳・翻訳課程」の立ち上げから現在に至るまでの経緯およびその現時点での成果と今後の見通しについて』

柴原智幸「2012年春 通訳・翻訳課程アンケート」

柴原智幸「内容把握のチェック方法としての和訳の再評価について」神田外語大学紀要第30号

柴原智幸 小坂貴志 朴シウォン「大学学士レベルにおける通訳翻訳課程—アンケート・インタビュー調査による神田外語大学生の認知分析—」日本通訳・翻訳学会『通訳翻訳研究』第10号